
紅鬼-ORGA-

城崎 來人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅鬼 - ORGA -

【Nコード】

N6893X

【作者名】

城崎 來人

【あらすじ】

―これは正義の物語ではない―

鬼哭編―陰―

全てが紅く染まっていた。

時は既に深夜。

そうでありながらも、その屋敷は煌々と照らし出されていた。

燃え盛る紅蓮の焰によって。

屋敷の中、ほぼ全てが火に覆われていたが、唯一火の手が弱い場所があった。

小さな一室だった。

年季の入った箆笥は、その上に乗っている可愛げの無い布人形と共に、徐々に炭へと変わりつつあるが、そこから先は何かにも阻まれるように畳が燃え上がることは無かった。

部屋のあるのは二つの影。

一つは紅の装束を纏った、白髪青年。

一つはその少年に抱きかかえられ、幸せそうに眠る少女。

死を受け入れたかのように、二人はじっとその場で指一つ動かさなかった。

しかし、青年の瞳は諦めた人間のそれではなかった。

「約束しよう、……る」

木片の爆ぜる音に声をかき消されつつも、青年は語る。

永久に眠り続ける少女に。

永久に目覚めぬ少女に。

聞こえない事は承知している。

だがそれでも、青年は誓い続ける。

「俺はお前の望んだ世界を……臨もうとした世界を、必ず……る」

青年は徐々に温もりが失われていく少女を、死の淵へと逝かないように、引き留めるように強く抱いた。

「……………恐らく、死後……………ると会う事はないだろう」

純粹で、清らかな人道を歩んできた少女。

混沌で、血塗られた邪道を歩んでゆく青年。

二人が現世で出会った事自体が、有り得ぬはずの奇跡だった。
しかしそれでも、何の因果か応報か、彼は出会ってしまった。

己が全てを敵に回すことになるうとも、護りたかった者の清らかな夢を知ってしまった。

彼は変わらぬ表情のまま、双眸から二掬の涙を流した。

爆ぜる火の粉に包まれて

叫び狂うは紅き鬼

悪鬼の所業開始せり。

―これより修羅を開始する

彼の道、善なれば悪を斬る

彼の道、悪なれば善を斬る

劍鬼の理、此処に有り―

血潮編 其ノ壱

―夜が来る、闇が覆う、悪が蔓延る―

人知れぬ闇の中、人の肉を喰らい、骨を貪る悪鬼あり。
されども世は静かに回る、犠牲一つで止まる事を知らぬ。

―霜月八日十九時十三分・???路地裏―

「た、助けてくれ…！」

暗い路地の裏。

日は既に沈み、街の光の届かぬ場所で、男は子供のように泣きじやくりながら助けを求めている。

恐れ慄き、足をもつらせながらも必死に逃げる。時にはポリバケツや配水管にその身をぶつけながら。

それでも男は気にせず、涙ながらに足を動かす。

何処に、と聞かれれば、『アレ』がいないのならば何処でも良い、と答えるだろう。

では『アレは何か?』、と聞かれても、彼には答えられるわけがなかった。

何故ならそれは、およそこの世の者とは思えないほど、おぞましい者だったからだ。

「ゲゲツ…ケケカハ！」

低く、くぐもった声が裏路地に響いた。

生肉を叩きつけたような音をたてながら『ソレ』は男に追いついた。

その巨大な図体を引きずるように、それは男に近づいていった。
暗い為によく分らないが、背は少なくとも男の二倍はあるだろう。

身体の筋は酷く膨れ上がり、顔と肩が一体化しているようにも見える。

顔は酷く爛れて、齒は常に剥き出しで、一部からは骨が覗いている。

生きていることが不思議なほど狂っており、腐っていた。

その…化け物は、逃げる男を楽しそうに、しかしどこか悲しそうに追いかけていた。

しかしその鬼ごっこも、逃げ道がなくなれば終わりである。

そう、男の逃げた先は行き止まりだった。

慌てて振り返っても、そこには巨体が道を塞いでおり、越えようにも高さはビルの屋上ほどまで昇らなければならぬ。

並の人間にそんな事が出来るはずもなく、男は絶望に叩き落とされた表情をし、その場に座り込んでしまった。

「…助けてくれ…お願いだ…助けてくれよ…？」

最後の望みを込めて、男は『ソレ』に祈るように話しかけた。話を通じるかどうか、分からない。

恐らくは微塵も通じないだろう、そんな諦めがあらながらも、本能は生きる為の手段を、一切躊躇^{ためら}う事無く使っていた。

すると一瞬だけ、『ソレ』は動きを止めた。

「…グッ…ゲがけゴ…！」

『ソレ』は男が懇願した一瞬、頭を抱えてもだえ苦しんだが、文字通り一瞬の出来事だった。

「クフ、クケケフク！」

苦しみが治まった『ソレ』は、再び男に視線を向けて静かに笑った。

「あ、ああ…あああああ…」

彼の望みはそこで途絶え、その命の灯を、儚く消し去られた。辺り一面を、彼の紅い華で彩りながら…

―同日十六時三十八分―

「坂井会長、この件について聞きたいことが…」

私立神楽坂学園生徒会室で書類と向き合っていると、書記である

伊藤慎吾が躊躇いがちに尋ねてきた。

この学園に入学して二ヶ月で生徒会書記に立候補し、見事当選したのだがこれはやはり経験不足によるものだろう、能力があるにも関わらずいまいち自信が無い様で、時折小さなことで会長や他の役員に質問をしてくる。

「なにか分からないことでもあったの？」

「えっと、はい…実はこの部分なんです…」

そう言いながら会長である坂井の目の前に渡されたのは入学時に全校生徒を対象に取られたアンケートの用紙だった。

見てみると「一言要望」の欄に何かと赤ペンでマークをつけており、坂井は何となく伊藤の聞きたいことが分かった。

しかしあえて口にしない。

「成程、尋ねたいことは何となく分かったけど、聞かせてもらうわ」

「え…はい、えっと…ここに印をつけているように、生徒からの要望でかなりの数で部費を上げて欲しい、という意見が多く寄せられていて…」

「そして君はこれに対してどう対処するべきだと思うの？」

「えっ、僕が…ですか?!」

逆に尋ねられるのは予想外だったのだろう、伊藤は目に見えて驚きの表情をしていた。

しかしそれも直ぐに元に戻り、伊藤は僅かに考えた後、思い切つて口を開いた。

「…そうですね、実績のある部活に集中させてしまつては新設したばかりの部活に十分に行き渡らなくりますから…更に詳細を書いた予算の使い道を提出してもらうことが良いかと…」

考える、というのはどう対処すべきかを考えていたのではなく、話すべきかどうかを伊藤は悩んでいたようだ。その証拠に、非常に明確な理由も添えた対処法を口にしていた。

その様子に会長である坂井陽菜子は静かに頷いた。

「確かに、それも一つの手ですね。しかしそうした方法を用いれば

人手が足らなくなる恐れもありますが、そのことに関しては……」

「言いだしたのは僕ですから、僕が最後までやります」

坂井が尋ねきる前に、伊藤は言い切った。

言ってしまったから伊藤は「少し図々し過ぎた」とでも思ったのか、慌てて口を押さえた。

が、坂井の反応は彼にとっては予想外だった。

「いいでしょう、その心構えなら実行できますか？」

「え……そんな、僕の意見なんかをそんな簡単に採用しても……」

「もつと自信を持って大丈夫ですよ。悪くない……むしろ良い案だと思います。しかし、さすがに一人では大変だと思うので、生徒会全員でこれは行いましょう。皆さんも、問題ありませんね」

坂井が他の役員に尋ねると、全員が首を縦に振った。

つまりは了承した、ということだ。

「では、全員の賛成が得られたので、今年の予算案は詳細な予算利用予定表の提出をしてもらってから始めます。仕事量が多くなりますが、皆さんよろしくお願いします」

坂井がそう宣言すると、その場にいる全員が「はい！」と元気良く答えた。

坂井陽菜子は先述の通り、二年生でありながらも神楽坂学園の生徒会長であり、人望の厚い少女だった。

少女というには相応しくないほど大人びた雰囲気纏っており、外部から来た人からは教師と間違えられるほどである。

その人望の厚さは、彼女が困っている人を見ては放っておけない正義漢だから、というものからだろう。この際「漢」については追求しないで置く。

彼女が二年生でありながらも、前期で三年生を押し退けて生徒会長の任にしているのも、彼女の方が三年の立候補者よりも頼りに見えたからだろう。

誰だってそう思うだろう、進学の為だけに「生徒会」の称号を得

ようとする人間に比べれば、生徒の為にその身を惜しむ事無く削る人間のほうが上に立ってほしいということは至極当然のことだ。

彼女が生徒会長の任に就いてから、約二ヶ月。彼女の行動の成果は徐々に現れ始め、学園全体が華々しくなった、とでも言うべきだろう。

一般生徒の中には「一年生の頃から始めればもつと良かったのでは？」という声も上がるほどになっていた。それも男女問わず、だ。何よりも彼女が人気な理由は、そのこれまで出した成果よりも、その人間性であろう。

困っている人間が居れば、分け隔てなく助け、悩み事があれば些細なことでも相談に乗り、まさに聖母という表現が当てはまるほどの善人だった。

その日の生徒会業務を全て片付け、坂井は家路についていた。他の役員に手伝ってもらうほどの仕事量ではなかったため、陽菜子が一人残って処理した。

神楽坂学園があり、陽菜子の家のある陣馬市は駅を挟んで住宅街側と学園・商店街側と分かれており、学園生のほぼ全てが線路を跨がなければ家に帰ることはできない。それは陽菜子も例外ではない。

まだ五時程度だというのに既に空には青みがかかり、徐々に黒く塗りつぶされていく。どれだけ街の光が輝こうとも、その黒を照らし出すことはない。

そして、その輝かしい光は地上すらも全てを照らし出せない。

ふと、わき道を見れば三メートルほどまでは道が照らし出されているが、それより奥となるとほぼ暗闇となり、十メートル先は完全な漆黒だった。

漆黒に塗りつぶされたのではない。漆黒を塗りつぶせないのだ。

しかしそれでも彼女は思う。

いつか必ず照らし出す。

いつか必ず塗りつぶす。

苦しむ人が苦しみ続ける世界であつてはならない。その為に自分が出来ることから…つまりは生徒会活動から始め、いつかはお世話になったこの町を、誰もが住みやすい平和な町にするために、何か貢献できればと考えている。

そんな事を思いながら歩いていると、わき道から僅かであるが何かがぶつかるような音が聞こえた。陽菜子は少し耳を澄ますと、「た、助けてくれ…！」と弱弱しいが助けを求める声が聞こえた。

これはただ事ではないと思い、考える間もなく声のした方向へと走り出した。

彼女には腕に覚えがある。

力無くして暴力を治めることは無理だということを子供の頃に痛感し。それ以降地元の道場で鍛えに鍛え、仕舞にはこの辺りで敵う者は殆どいない状態にまでなった。

当然、暴力には暴力ではなく、あくまで対抗する手段であつて、解決の手段としては使わない。それが彼女の信念だった。

今回もその場は抑えるが、一時治まってから話し合いで解決しようと考えていた。

相手も人間である以上、話が通じれば和解できる可能性も無いことはないだろう。彼女はそう考えていたのだ。

…その、化け物の姿を見るまでは…

声のした方へと陽菜子は必死に走った。

学内でも一二を競うその足が現場に着くまでに数十秒ほどかった。

「……？」

目の前には壁があつた。

それだけだった。

少し辺りを見回してみるが、声の主はいないようで、陽菜子は更に不思議に思い首をかしげた。

（…思い違いでしょうか…？）

それならそれに越した事はないが、どうにも違和感と不安が拭いきれない。

先ほどの助けを求める声は、大の男のもので、怯え具合からは余程のことがあったと見ても間違いないだろう。

それだと言うのに、周囲に人はいない。

どういことだろうと考えようとしたところで、ようやく陽菜子は辺りの匂いに嫌悪感を覚えた。

肉を腐らせて放置したような匂いが裏路地に充満していたのだ。

(…酷い匂いですね…そこに散らばっているゴミでしょうか…)

倒れたポリバケツから匂いが発生していると陽菜子は思ってた近づくが、そこでおかしい事に気がついた。

…ポリバケツに入っていたものはダンボールだったのだ。

汚れた様子もなく、箱にプリントされているのは『業務用プリント用紙』や『プラスチックファイル』などの文具のものだった。

ダンボールをポリバケツに入れるのはどうかと…とも思ったが、問題はそこではない。

(…なら、この悪臭の原因は…?)

そう思ったところで、ビチャ、という湿った音が路地に響いた。

何かと思つて陽菜子が振り返ると…

先ほど、壁だと思っていたものが、蠢いていた。

「ヒツ…!?!」

陽菜子は思わず悲鳴を上げてしまった。

それと同時に、無意識的に口を抑えた。

そうした理由は、おそらく本能だろう。

危険を察知し、生き残ろうとする本能が、声を殺させ、蠢く『ソレ』からゆっくりと遠ざからせたのだろう。

腐臭は蠢く壁からしていることに陽菜子が気付くと同時に、壁から目らしきものが見えた。

視線が偶然重なってしまった。

それと同時に、陽菜子は体の向きを九十度変え、先ほど通つてき

た道を逆走した。

「ゲグオオオ！」

およそ人のものとは思えない悲鳴が、暗い路地に低く響いた。

…陽菜子は、『ソレ』と目が合った瞬間、見てはならないものを見てしまった。

人のものらしき、千切られた腕を、『ソレ』が貪っていたところを…

吐き気がする。

眩暈がする。

世界が狂う。

体が覚束おぼつかなくなる。

それでも必死に、来た道を駆け抜けた。

おそらく来た時をはるかに越える速度で。

それでも『ソレ』は追って来る。

最上級の獲物を見つけたような狩人のように。

歓喜して。

喚起して。

奮起した。

悪鬼だった。

(…な、何！？アレは一体なんなの！？)

考えても答えが出ない問いだと分かっている、そう思わずにはいられなかった。

肺に残っている酸素を全て使っても逃げなければ。

しかし、『ソレ』は何処まで追って来るかは分からない。

もしかすれば、直ぐにでも追うのをやめるかもしれないし、永遠に追い続けるかもしれない。

ゴールの見えないレースで、ひたすら全力で走り続ける辛さを知り、必死に陽菜子は逃げる。

呼吸する事は既に忘れていた。

息をする一瞬で『ソレ』が追いついてくるかもしれない。

振り返った瞬間に、『ソレ』が彼女を喰らっているかもしれない。だから、全身の力を全て逃げることに注ぎ込む。

するとようやく大通りが陽菜子の眼前に見えた。最後は転げるように大通りに出ると、後方から足音が聞こえなくなっていたことにより、ようやく気付くことができた。

振り切ったのかと彼女は思ったが、そうではなかった。

…居る、のだ。

街の光に照らし出されぬよう、息を潜めている。

見えないが、確かにそこにいることが陽菜子には分かった。

（…光が苦手なの？）

最初陽菜子はそう思ったが、それが直ぐに間違いだと気付いた。

『ソレ』は陽菜子を諦めきれないように何度も影から手を伸ばす。

一瞬、その肉が眼前に迫ったので陽菜子は急いで後退し、距離をとった。更に右へと方向を変えると、腐肉はその動きに誘われるように向きを変えた。しかし腐肉は届かないと見ると、急いで裏路地へと手を戻した。

（…違う、光が苦手なんじゃない…多くの人に見られないようにしている？）

その考えが的を射ていたのか、集団の声が徐々に大きくなると『ソレ』は逃げるように去っていくのが音で分かった。

気配が完全になくなってようやく陽菜子は息をする事を思い出した。

長時間止めていた為だろう、酷く荒い息をしていた。

肺いっぱい酸素が行き渡ることがこんなにも生きていることを実感させる。

身体は小刻みに震えていた。恐怖からか、それとも生きていることへの喜びか。

「だ、大丈夫ですか…？」

その只ならぬ陽菜子の様子に声をかけずに入られなかったのだろう、仕事帰りのサラリーマンらしき中年男性が心配そうに声をかけ

てきた。

「え、はい…だ、大丈夫です…」

「本当ですか？　なんだか顔が青いようにも見えるけど…」

「は、はい。本当に…大丈夫です。少し走って息切れをしているだけなので…ご迷惑をおかけしました…」

陽菜子がそう言くと、男性は信じきれない様子をしながらもその場を去っていった。心の底から心配しているのだろう、その場を完全に立ち去るまで男性は時折陽菜子のほうへと振り返っていた。

…冬の足音も近づく季節だというのに、陽菜子の身体からは滝のような汗が流れていた。

「…会長、なんだか体調が悪そうですが…大丈夫ですか？」

三日後。

生徒会業務を行っている最中に、書記の女子からそんな事を陽菜子は聞かれていた。

書記の女子は躊躇いがちでありながらも、陽菜子の様子のおかしさに耐え切れず尋ねたようだった。

「え？　あ、いや。大丈夫ですよ」

「そうですか…？　なんだかここ三日間会長の元気がないように見えたので…」

「僕にもそう思えました」

会計の男子もそう言った。

するとそれを皮切りに生徒会役員全員が心配の声をあげた。

「確かに、ここ最近会長が少し静かになったような気がします」

「そうじゃないでしょ？　心なしかやつれた様な感じが…」

「あ、百合もそう思った？　私もそうじゃないかなって思っていたんだけど」

「あと時々小さな物音でも、反応したり…」

彼女は可能な限り平静を装っていたが、やはり隠しきれない部分はあったようだ。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫です」

彼女達の心配は陽菜子にありがたいと同時に申し訳ない気持ちにさせた。

ありがたいというのは、些細な変化でも気付き、心配してくれる周囲の優しさに対してである。

申し訳なさは、それだけ心配してくれる役員達に対して正直に『あの事』を話せないことだ。

出来れば『あの事』を吐き出して氣を楽にしたい。

しかし、もし言ってしまうと彼、彼女達が『アレ』に巻き込まれたら…

おそらく話した自分を何時までも呪うだろう。

そして、『アレ』は可能ならば絶対に近づいてはいけない者だ。

陽菜子は本能的にそう悟っていた。

幸いこの三日間は何事もなく過ごすことが出来たが、幸運に幸運が重なっているだけかもしれない。何時何処で再びあの化け物に襲われるか分からない為、陽菜子は『あの事』以降ともに気の休まる時間が無かったのだ。

家に居ても眠っている間に襲われることもありえる。もし、あの化け物が学園に潜みこみ虎視眈々と私を狙っているとすれば…悪い想像は考え出すと止まる事を知らず、悪戯に陽菜子の精神を蝕んでいた。

「ところで先日頼んでおいたボールペンの補充は…？」

インクが切れかけているボールペンが多くなり始めたので、陽菜子が昨日庶務の男子に頼んでいた仕事を確認すると、庶務は忘れていたことを思い出したように「あっ！」と声をあげた。

「…忘れたんですね？」

「…す、すみません…」

「飯田君、なんだか体調が悪そうですが、大丈夫ですか？」

先ほど尋ねてきた女子の真似を陽菜子がすると、庶務の男子は恥ずかしそうに頭をかいた。その様子に周りにいた役員は思わず口を

抑えて笑いを堪えていた。

「いえ、自分は元氣だけが取り柄なので！」

「ですが部活の仲間との買い食いには気を取られて文具店で注文するのを忘れるのは感心しませんね」

「み、見てたんですか！？」

「いえ、想像です」

自ら墓穴を掘ってしまった飯田は更に縮こまった。

「…気配が濃厚になっている…木戸の情報に間違いはないみたいだな」

陣馬市南部にそびえる巨大堤防の上に、その男はいた。

堤防は海に接した陣馬市を津波や台風から守るために設置されており、その大きさはおよそ六メートル。長年陣馬市を守っているため所々に傷が目立つが、それでも揺らぐことのない石の壁はまさに陣馬市の守護神というべきだろうか。

一見、海の被害から陣馬市を守っているようにも見えるが、彼からしてみれば北部の山脈も含めて街の人間を取り囲んでいるようにも見える。

逃げ場を封じるように。

知らずに柵に囚われた羊のようにも、彼には見えた。

本来一般人の立ち入りを禁止しているこの場所にどうやってたどり着いたかは定かではない。一時的に彼は紅い目を光らせて街を見回す。

「…『怪異』は映らない…？ 気配がありながらも見る事はできない、なんて初めてだな」

信じられないといったように、今度は身を乗り出して街を見回した。

堤防の縁に片足だけを引っ掛け、艇子の原理で身体を地面に対し水平にする。当然、彼の身体は完全に中に浮く形になった。

しかしそんな雑技団も裸足の妙技をしながらも、彼は余裕の顔で

居た。

「……やはり反応はない…よっ」

勢いをつけて彼は元の体勢に戻る。それも彼にとっては大した事のない様だった。

彼の紅かった瞳は、普通の人間と同じく茶色に変わっていた。

「仕方が無い、名残から地道な調査を始めるしかないな…」

彼は視線を陣馬市北部に位置するとある場所へと向けた。

「…学園に接触した人間がいる可能性あり、か…忍び込むにはそれ相応の用意をしないとイケないな…」

そう言うとは彼は顔に手を当て力強く握る。

すると彼の顔は僅かに歪んだ。

手を離すと先ほどの顔とは異なり、少し若くなった少年の顔があった。

造りは同じだが、先ほどの精悍な顔つきとは異なり、どこか幼さとあどけなさを残した顔になっていた。

背も先ほどとは異なり、百八十をゆうに越える身長は百七十程度にまで縮んでいた。

「こんなものか…後は木戸に裏工作と更なる情報収集を頼んでおくか…」

それだけ呟くと、男…いや、少年は身体を翻した。

次の瞬間、巨大堤防の上には影一つ無かった。

血潮編 其ノ貳

「……」

陽菜子の足取りは重かった。

この三日間、出来る限り人通りの多い場所を選び、更には毎日違うルートを歩いていたが、やはり怖いものは怖いのだろう、彼女の手は触れなければ気付かれない程度だが震えていた。

今回は生徒会業務を早いうちに終わらせて、日がまだあるうちに帰る事にしたようだが彼女は安心しきれていなかった。

…何故その日は、『あの事』のあった道を通ろうとしたのか。

彼女にはそれが分からなかった。

無意識のうちに、例の化け物が最後に手を伸ばした場所にまでたどり着いていた。

「……」

そこには先客がいた。

意味深に化け物がいた裏路地へと視線を固定し、静かに眺める奇妙な少年がいた。

時折掛けている眼鏡を弄り、何かを呟き、動いたと思うとおもむろに地面をなぞり始めて裏路地へと進んでいった。

「あっ！」

思わず陽菜子は声をあげ、それが聞こえたのか少年は驚いたように飛び跳ね後退して裏路地から姿を現した。

「え、な、何か…？」

少年は何か自分が間違えたのではないかといった微妙な表情をして陽菜子を見た。サイズが合っていないのか、掛けている眼鏡は鼻先に引っかかり危うく落ちそうになっていた。

「あ、いえ……」

無意識的にあげた声に反応されたものだから、陽菜子はどう説明しようかと頭を悩ませた。化け物の危険性を語ってもおそらく信じて

はくれないだろう。そう思って他の言い訳を考えた。

「そ、そこは…裏路地は危ないので、入らないほうがいいですよ？」

…間違った事は言っていない。そう思いながらも要点をえない説明に陽菜子は自己嫌悪していた。

その様子に少年はしばらく黙り、陽菜子を静かに見つめた。

「…ここで、何かあったんですか？」

「…えっと…す、少し凶暴な犬が徘徊しているので…」

端から見ても、陽菜子自身から見ても嘘だということが丸分かりの言葉を並べるが、これで少しでも警戒心を抱き、この場所から離れればと思っただけで出した策だった。

しかし、少年は陽菜子の予想をはるかに上回る反応をした。

「その凶暴な犬…もしかして、人の何倍も大きい『何か』ではないですか？」

その言葉は陽菜子を驚かすには十分な威力だった。

呆気にとられた陽菜子は何も言うことができなくなり、開いた口が塞がらなかった。

「すいません、そんな生き物が居るはずないですよね」

少年は先ほどとは違って明るい様子でそう言った。

そこでようやく陽菜子は我に返ることができた。

「そ、そうですね。取りあえずここは危険なので近寄らない方がいいですよ」

ようやく伝えたいことを伝えきり、陽菜子は安心したように息をついた。少年も裏路地は諦めたのか、静かにその場を離れて商店街の一家に入ってしまった。

陽菜子はそれを見て、その場を去ろうとすると今度は少年が彼女を呼び止めた。何かと試してみるとその手には某コーヒー有名店の紙コップが両手に握られていた。

「すいません。実は僕、この辺りに引っ越してきたばかりなのでこの辺りのことに詳しくないので…」

言いながら少年は陽菜子に半ば無理矢理その手に紙コップを握ら

せる。

「あ、冷めると美味しくないので早くどうぞ」

僅かにせかされて、陽菜子は慌ててコーヒーに口をつけた。入っていたのはカフェオレであり、苦味と甘みの丁度良いハーモニーと温かさが口いっぱいに広がった。

この三日間、何時襲われるかもしれないという恐怖感に常に襲われ、気が休まる時間が一時もなく、精神的には既にボロボロだった。食欲も無くなっており、水だけで過ごしてきたので三日ぶりの甘さと苦味は体中に染み渡った。

少年は陽菜子がカフェオレに口をつけたのを確認すると勢い良く話を切り出してきた。

「そこで厚かましいお願いですが、この街を案内してくれませんか？」

陽菜子はそこで気がついた。

報酬の前払い…これは断れなくなってしまった。

「名前は朱鷺沼真理（しじぬま まこと）といいます。どんな風に呼んでもらっても構いません」

出会った少年は陽菜子の隣で静かにそう言い、頭を下げた。一端静かな場所で落ち着いて話すよう決め、陽菜子が彼をここ・一葉公（いちようこう）園につれてきたのだった。

公園では子供たちが無邪気に遊具で遊んでおり、彼女達はそれを眺めるように公園の端にあるベンチの一つに腰を掛けて話し始めたのだった。先ほど朱鷺沼少年が渡したカフェオレはまだ温かく、冷めた手を温めるには丁度良い温度だった。

「坂井陽菜子です。よろしく」

陽菜子は朱鷺沼に釣られるように頭を下げた。

「引越して来たという事は…近いうちに神楽坂学園の編入試験を受ける予定ですか？」

「神楽坂？ そんな名前だったんですね」

「？ ええ、陣馬市に住む人は大抵そこに通いますから…そういう私も神楽坂の高校生です」

少年の反応に疑問を覚えながらも陽菜子は言った。

朱鷺沼の外見は中等生第三学年か高校生第一学年程度だった。

「そうなんですか。えっと、実は僕、両親の言うまま着いて来ただけなので通う学園の名前も知らないんです」

朱鷺沼は申し訳無さそうに頬を人差し指で掻きながら話した。

「どれぐらいこの町に居るかは分からないのですが…それでもこの町を良く知りたいと思って歩いていたんですけど…見事に迷ってしまっ」

「だからといって慣れない町で裏道を通ろうとするのは自殺行為ですよ？」

「反省してます…」

窺めるつもりはなかったのか、陽菜子は朱鷺沼が頂垂れると少し慌てた。

「いえ、怒っているわけではないので…」

「そういうわけで坂井さんに町案内をお願いしたのですが…」

「…成程、そういう風に持って行きますか…」

「わざわざ危険だと教えてくれるような人なら安心だと思って」

顔を上げた少年は微笑んでいた。

「…分かりました、分かる範囲でしか案内できませんが…」

幸い彼女にはこの後の予定がない上に、一人暮らしであるため家の門限は特にない。

彼女は学園に通う以前は両親と共に暮らしていたが、父親が転勤になり母親はそれに付いて行く事にしたので現在は住宅街側にある一軒家で暮らしている。

そこまでの理由は至極単純で、神楽坂学園が国内で上位を争う進学校であることと、父親の転勤が決まったのが学園に合格した後だったということだ。そのため、多少遅くなっても問題は無いと思いい、彼の頼みを引き受けたのだった。

「ありがとうございます！」

彼女の反応に朱鷺沼は元気よく答えた。突然の大声だったため、周囲の遊具で遊んでいた子供達は何事かと思つて全員がこちらを振り返つた。

自分の声が大きすぎたことに気づいたのだろう朱鷺沼は再び申し訳無さそうに体を縮めた。あまりに子供のような反応に思わず陽菜子はクスリと笑つてしまった。

「それじゃあ、これを飲み終えたら町を案内します」

互いの手にある物は、人肌程度に温くなつていた。

陣馬市はここ数年で爆発的に都市開発の進んだ元田舎町であり、南は海に、東西北は山に囲まれた土地であり、堤防もあるために人工的な盆地といった市だ。

先述通り北部には商店街と神楽坂学園があり、昔ながらの複雑な街の構造をしている。対して住宅地側はこの数年で開発された場所であるために盤目状に一戸建て住宅が並べられている。

まず陽菜子が案内したのは学園付近と商店街だった。

神楽坂学園は私立の進学校という事もあつてかセキュリティが非常に厳しく、部外者は事前の申告無しに入校することは難しい。

彼女の立場を利用して見学させることも不可能ではないが、長く時間がかかつてしまい、更には制限時間を設けられてしまう上に監視付きという条件があるため、周囲から見た学園の紹介をした。

それをある程度簡潔に説明すると今度は商店街へと足を運んだ。

夕方になり各店は活気づき、呼び込みの声が右から左からと響き渡り、中央に立っていると何を言っているかさっぱり解らないほどの多重音声状態になっていた。

陽奈子は朱鷺沼に生活必需品を扱っている店を幾つか紹介し、それらすべての店を紹介し終わるとちょうど商店街側と住宅街側に分ける駅へとたどり着いた。

「……すいません、あそこにある高い建物は一体？」

駅構内を渡って向こう側に渡ろうと陽奈子が考えていると、朱鷺沼はいきなり足を止め、商店街側東部にある立てたばかりの高いビルを指さして静かに尋ねてきた。

「ああ、あれは『浦部グループ』の本社ビルだと聞いています」

「……『浦部』？」

「陣馬市の発展に大きく貢献したグループですね。というよりは陣馬市の開発を最初に提案して実行に移した張本人です。おかげさまで過疎化の進んでいた陣馬市に活気が戻ってきました。一年半程前に出来たので非常に新しいことと研究所が併設されていることが特徴です」

「ふむ……」

嬉しそうに話す陽奈子とは対照的に朱鷺沼はその建造物をにらむように見つめた。運よく陽奈子は朱鷺沼の後方にいたために彼の表情を見ることが出来なかった。

「……ですが、最近妙な噂が流れていますね」

「……噂ですか？」

陽菜子の呟きに朱鷺沼は聞き返した。

「はい。浦部グループがこの町に来てから事件が多くなった、と……そうなんですか？」

「確かに多くはなっているのですが……それも心なし感じる程度です」
「その事件に……浦部が関係していたらどう思いますか……？」

朱鷺沼は視線を一切変えずに陽菜子に尋ねた。

「……………え？」

予想外の質問に陽菜子は思わず聞き返してしまった。

あまりにも突然な話だったので、陽菜子の思考が追いつかなかったのだ。街を発展させた張本人が、街に被害を与えているなど誰が想像できようか。

陽菜子からの反応がないことを確認すると、朱鷺沼は笑いながら振り返った。

「失礼しました。冗談ですよ。でも、仮の話に真面目に付き合っ

しまう辺り、陽菜子さんは真っ直ぐで誠実なんですね」

先ほどの冷たい印象はなく、公園で話したときの朱鷺沼に戻っていた。

「か、仮の話…？」

「はい」

悪びれもなく朱鷺沼は答えた。

「いや、何かの小説で読んだ『巨大企業が黒幕で』という設定を思い出して言ってみただけです。まさかここまで真剣に反応されるとは思いませんでした」

からからと笑いながら無邪気に話す朱鷺沼に陽菜子は少なからず怒りを覚えた。

「そ、そういう話はきちんと前置きをして置いてください！『小説では』とか！」

「あははは！大抵の人は『そんな馬鹿な』で流していたから大丈夫だと思っていたので」

柄にもなく大声で怒る陽菜子に対して朱鷺沼は非常に楽しそうだった。

ここは駅周辺かつ今は帰宅時間なので人通りも多く、周囲にいた人たちは何事かと思つて遠巻きに眺めていた。

「何？何があつたの？」

「分からないわ。ただあの男の子が女の子を怒らせたみたいで…」

「もしかして痴話喧嘩じゃないのか？」

「だとしたら…男の子が二股でもかけていたのかしら？」

「ありえそうね…可愛い顔して…恐ろしい子！」

「あんな美人が彼女だというのに浮気なんて…ふざけている！こちらとら帰つても古女房しか待っていないんだぞ！」

「へ、誰が古女房ですって？」

「そりゃあ、俺のカミさんが…ってお前！？いつの間に！？」

「あんな美人が…のところかしらね？買い物帰りであなたを見かけたから声をかけようと思つて…」

「あ、あの…話し合えば分かる。だからその手に持っている唐辛子の束を仕舞って…」

「問答無用！」

「ぎゃあああああ！ 辛いいいいいいい！？」

彼女達の会話が新たな犠牲者を生み出していた。そのことによりやく気付いた陽菜子は逃げるように野次馬の輪を突破して駅へと走っていった。

野次馬の注意が中年夫婦の喧嘩に移ると、彼女を追うように朱鷺沼も歩き出した。

幸い野次馬に気付かれることなく無事に抜け出し、飄々と朱鷺沼はその場を後にした。

「ありがとうございます。ここまで大丈夫です」

駅構内を抜け、住宅街側の出入り口で息を切らしていた陽菜子に対し、朱鷺沼はそういった。

「…そ、そう…ですか」

息も絶え絶えながらも答える陽菜子はさすがというべきか、超が付くほどの真面目だった。落ち着いてから答えれば良いものを、わざわざすぐに返す辺り彼女の性格がよく出ている。

「ここからなら自分でもある程度地理は理解しているので…後は気ままに歩いてみます」

言うが早いか、朱鷺沼は陽菜子の返事を待たずに線路に沿って歩き始めた。

ぽつぽつと街灯が点き始め、彼の後を追うように光が街路を照らしていった。

陽菜子が息を整え、顔を上げると、そこには既に朱鷺沼の影はなかった。

「も、物凄くマイペースな人ですね…」

しかし思い返してみれば奇妙な少年だった。

公園で最初会った時は、大人しそうで控えめな性格に見えたが、

先ほどの様子からは非常に肝が据わっており、かつ朗らかな正確をしていたようにも陽菜子には見えた。

それはそう、まるで役を忘れた役者のようだった。

何をすべきか定まらずに、様々な行動をしているようにも見えた。そして一瞬感じた、冷酷な雰囲気。

僅か三時間のコミュニケーションではあったが、その間に彼はどれだけの役を演じ損ねたのだろうか。

「…考えても仕方が無いですね…」

おそらく彼にも事情があるのかもしれない。そう思って陽菜子は考えることを止めようとした。が、これまでの彼との会話で奇妙な点が幾つもあったことを思い出した。

『その凶暴な犬…もしかして、人の何倍も大きい』『何か』ではないですか？』

『浦部に原因があるとしても…？』

…そう、まるで何かを知っていながらも隠しているような反応が何回か感じられた。普段なら話半分に聞いているが、三日前のようなことを体験している陽菜子には意味深に感じられた。

もちろん、事件以降彼女が警戒心を強めているから過剰に反応しているということも充分にありえることだ。

「…帰って休みましょう…」

彼女の自宅は駅から約五分という場所にあるので、このまま帰れば夕飯の準備には十分な時間を確保できる。

両親が転居する以前から陽菜子は家事全般を行っていたのも加えて、この一年間の一人暮らしのおかげで短時間のうちに料理をする事も出来るようになっていた。

やるべき事を早く終わらせて興は早いうちに寝てしまおうと彼女は思いながら家路に着いた。

彼女が朱鷺沼を見つけることが出来なかった理由は至極単純だった。

光の届かない屋根の上にいたからだった。

彼女が朱鷺沼の向かった方向とは違う場所へ向かい、彼はその背を見送っていた。

完全に見えなくなることを確認すると、朱鷺沼はポケットに入っていた機器を取り出して一つボタンを押した。

それは奇妙な機械で、付いているボタンが三つしかなく、一見ではどういふものかは想像できないものだった。

簡単に説明すると、これは耳装着型の通信機器であり、通信対象は事前に設定した二人だけというものだ。汎用性は低いが非特性に優れており、特殊な手段を用いて通信しているため、会話を傍受される心配は皆無だ。

大きさは握り拳に収まる程度の大きさで非常に軽く、行動に一切の支障をきたさないことが最大の特徴だろう。

朱鷺沼はボタンを押すと手馴れた様子でその機械を装着した。

「木戸、頼み事を追加だ」

『よお、真理^{しんり}。一日で二回も連絡をよこすとは珍しいな』

朱鷺沼が話すと、それに応えるように機器が震えた。

声は壮年男性のものであり、低くありながらも朗らかな声だった。強弱をつけたり時々静かだったり機器はまるで生きているようにも見える。

壮年男性の言うことは無視して朱鷺沼は要点だけを話すことにした。一々反応していたら会話が進まず何時までも停滞状態になることを知っているためだ。

「先ほど…と言っても今朝の話だが、その時に学園の編入先を決めていなかったからその…」

『神楽坂学園だろ？ もうすでに俺の方で必要な手続きは済んでいるよ。あとはお前が編入試験を受けて合格すれば終了だ』

「…ああそうだ。しかしお前が既に神楽坂学園に編入手続きをしているとはさすがだな…」

『ああ、そりゃあ陣馬市には神楽坂しか無かったからな』

「……………なんだと…？」

信じきれないといった様子で朱鷺沼は尋ねた。

『更に言えばお前がそこに到着する前にもう手続きは済んでいるよ』
そんな朱鷺沼の様子を一切気にすることなく、壮年の男は悪びれずに言った。

「…編入する学園は自分で決める、と言っていたのは？」

『あの時は忘れていたんだ。手続きが終わっていたのに気づいたのは連絡した後だったからかな。いや、歳は取りたくないもんだ』

「歳を取りたくなければささとくたばれ耄碌^{もろく}老人が、何時までも四十二でいられるぞ。まあ骨と肉と血の塊になるがな」

怒りを堪えている為静かではあるが言葉の端々には殺意がはみ出していた。というより殺意しか含まれていなかった。

それもそうだろう、彼・朱鷺沼も陽菜子に負けず劣らずの真面目な男であり、探せと言われれば街全体を歩き回って下調べをし、頭を全回転させて短期間で決めるほどだ。

加えてこの壮年男性から早期の解決を頼まれているため、そんなことに時間を割けるのはこの日だけだったのだ。

それを見事に『意味なし』と遠まわしに言われたのだ。並みの人間なら怒っても仕方のないことだろう。

『歳を言うな、歳を。ただでさえ厄年だというのに加えて独身だからな…どこかに結婚相手は居ないか？』

「性別を問わなければいくらでも紹介できるが？」

『すまん、女性オンリーで頼む』

「元女性と心だけは女性。どっちが好みだ？」

『体が女性、でよろしく頼む』

「なら諦めるクソジジイ、その選択肢はそもそも存在しない…言うことも言ったからもう切るぞ」

それだけ言い朱鷺沼が機器の真ん中のボタンを押すと、先程までほぼ絶え間なく震えていた機器はウンともスンとも言わなくなった。その静かになった電話を黙ってしばらく見つめる。

「
…女性好きと忘却癖がなければなあ…」
朱鷺沼は諦めがちに息を吐きながら静かにつぶやいた。

血潮編 其ノ参

その夜から三日後。

朱鷺沼真理の姿は神楽坂学園の二年D組にあった。

サイズが大きい制服を身に着けているためか、手が袖によって完全に隠れてしまい、裾は足が隠れてしまうのではないかと思うほど長かった。

あまりにも珍しい神楽坂学園への編入生ということで、学園内には大きな話題を呼んだ。というのも神楽坂の編入試験は通常の入学試験に比べてはるかに難解であり、さらには合格点もかなり高めに設定されており、これまで一度たりとも編入に成功したものは居なかったからだ。

注目を集めるのも仕方のないことで、教壇の上で自己紹介をしている間、朱鷺沼はクラスのほぼ全員から奇異なものを見るような視線を注がれた。

「朱鷺沼^{まさと}真理です。須賀市から転校してきました。よろしく願います」

あまりに多く注がれる視線が嫌になつてきたのか、早口で自己紹介を終わらせようとさらには空いている席に行こうとする朱鷺沼だったが、それも担任の一言によって阻まれた。

「それじゃあ、朱鷺沼はこれからお前たちと共に机を並べ勉学に励む友人になるから、何か個人的に聞きたいことはあるか？」

これによって朱鷺沼は止まらざるを得なくなり、許可が出ると同時にクラスは男女問わずに手を挙げ質問をぶつけようとしてきた。

「編入試験ってすごく難しいって聞いていたけど、どうだった!？」

「制限時間を目一杯使って全問に答えることができました。自分でも合格したのが不思議なくらいです」

「何か部活に入る予定は？」

「今のところは決まっていますが、家の方でやらなければいけな

いことがあるので多分参加はほとんどできません」

「彼女は？」

「いない歴〓年齢です。少し寂しいです」

「スリーサイズは？」

「上から72・60・75…ってこれ誰が得する情報ですか？」

律儀に答える朱鷺沼に対する質問会は徐々にヒートアップして行き、いつの間にか周囲には蟻一匹這い出る隙間すらないのではないかと思うほどに囲まれていた。

さすがのこの状況は腕っ節に自信のありそうな担任ですら諦めたのか、男教師（長田）は窓際でお手上げのポーズをしていた。

時計を見ると授業の開始まではまだ十五分以上あり、それまでずっとこの状態かと朱鷺沼が覚悟を決めたその時だった。

「皆、朱鷺沼君も困っているからここで一旦彼を席に着かせてあげてください」

よく通る高い声が響いた。

朱鷺沼の横にいつのまに來たのか、そこには坂井陽菜子の姿があった。

朱鷺沼とあった時とは異なり大分調子を取り戻しているようで、柔らかでありつつも凜とした雰囲気をもっていた。

「え〜？ これで終わり〜？ もっと聞きたいことがあったのに…」

「一気に聞かないようにしてもらっただけです。順番に一人ずつ、決まった時間までであれば親睦を深めるという意味でも問題はありません。全員一旦席に戻ってください」

さすがは生徒会長と言うべきだろうか、先程まで暴徒となりかけて押しかけていたクラスメイトは全員離れ、今度は話す順番を決めるためのジャンケンで騒がしくなり始めた。

その間に朱鷺沼は陽菜子の先導についていき、先ほど空いていた席へと着くことができた。精神的な負担はやはりあったのだろう、朱鷺沼はようやく一息つくことができたようで全身の力を抜いて天井を見上げた。

「すみません、何しろ編入生は学園でも初めての事なので皆珍しがつて…悪気はないのですが…」

その様子が気になったのか、陽菜子は少し申し訳なさそうに謝った。

「ああ、大丈夫ですよ。少し驚きましたけど、楽しい人たちですね」

「時々暴走することが玉に瑕ですけどね」

「そうみたいです」

意見が一致したことが面白かったのか、二人は同時に小さく笑った。

「それでは改めて自己紹介を。神楽坂学園現生徒会長・坂井陽菜子です。この学園について分からないことがあれば遠慮なく尋ねてください」

「わかりました。…坂井会長と言ったほうが良いですか？」

「どちらでも構いませんが…個人的に会長は無しの方が嬉しいです。ね。会長と呼ばれるととてもよそよそしく感じられてしまうので…」

「じゃあ、坂井さんで…」で、突然ですけど、編入生ってそんなに珍しいものなんですか？」

この教室…いや、この学園に入った時から朱鷺沼は周囲からの異様な視線を感じており、すれ違う人全員に話題にされていたのも知っている。

悪口ではないので怒る理由もないが、やはりあまり気分の良いものではなかったらしく、朱鷺沼は少し顔をしかめていた。

「それは仕方がないですね。実を言うと、編入試験は以前は都内でも指折りの進学校に通っていた生徒が受けても合格できなかったほどだったのです…」

「えっと…その人は多分進学校の中では下の方だったのでは…？」

「そうならよかったんですが、残念ながら学内でトップレベルの人だった、ということを生方から聞きました」

「……………」

ようやく自分のしたことの大きさを理解したのか、朱鷺沼は額を

押さえて天井を仰いだ。

「…なるほど、それなら自分がこれほどまでに注目されてしまうのも仕方がないですね」

「一応この場合は凌ぎましたが、休み時間はないと思ったほうがいいですね。大分順番が決まったみたいで…ほら、最初の質問者ですよ。そう言って陽菜子が体をずらすと何時の間にいたのだろうか、シヨートカットの女子がいた。その女子は陽菜子が退くと同時に身を乗り出してきた。

「ねえねえ、朱鷺沼くんって須賀市の方から来たって言っていたよね？」

見た目通りの元気な女子のようで、少したじろいだ朱鷺沼をきにする事なく質問してきた。

「は、はい」

「実は私、有名な場所は結構行ったことがあるんだけど、出雲と須賀だけは行ったことがないんだよね〜！それで朱鷺沼くんに聞きたいんだけど、須賀ってどんな所？」

「えっと…とにかく緑が多い街ですね。駅から降りると目の前に森があるくらい木に囲まれていますよ」

「へ〜！っていうことは須賀って田舎になるの？」

「そうでもないですね。都市部として発展している場所もありますよ。けど隣の家まで数キロもあるような場所もありますから…」

「ふーん、面白そうだな〜いつか行ってみたいな〜！」

情報を加えると、彼女の言っていた出雲は神の國といわれる日本でも有数の神聖な地区であり、以前は観光地としてもその名を轟かせていた。

しかし三年ほど前に、突如政府から『第一種特殊立入禁止区域』に指定され、一般人が入ることは容易ではなくなった。彼女が訪れたくても行けない理由はそこにあった。

公に知らされている原因は『汚染物質の拡散防止』だが、如何せん説明が不足しすぎていたため納得の出来ない一部の人間は度々デ

モなどの反対運動を行なっている。しかしその甲斐虚しく、開放の提案…すなわち民意は一度たりとも通ることはなかった。

「はい、では森口さんはここまでです。次の人、どうぞ」

陽菜子がそう言うのと森口と呼ばれた少女は大人しく下がり、入れ替わりで体つきのよい男子が現れた。

彼の後ろを見ればかなりの列ができており、クラスメイト全員が並んでいるようだった。

「朱鷺沼君、あと二十九人です。頑張ってくださいね」

「……………ははは……………」

陽菜子の激励に対して朱鷺沼は乾いた笑い声しか出せなかった。

「会長のクラスに初めての編入生が来たって本当ですか？ 確か名前は…朱鷺沼真理でしたよね？」

午前の授業も終わり、陽菜子は生徒会役員と共に昼食をとっていると、庶務の女子が興味津津の様子で話しかけてきた。やはり学園全体で話題になっていたのか、彼女がそう切り出すとほかの役員も箸の動きを緩めた。

「そうです！ 私のクラスでも話題になっていて…どんな人なんですか？」

推薦を決めて生徒会業務を手伝っている三年も気になっていたのだろう、もしくは話題が少なくなる時期だからこそこのような話に興味をもっているのかもしれない。

「そうですね…非常に大人しい男子ですね」

「格好イイ系ですか？ それとも可愛い系ですか？」

「背が小さくて眼鏡で…どちらかと言えば可愛いの方でしょうか？」

「あー！ 何かすごく見なくなってきた！」

女子にそのような話題はやはりつきものなのだろうか、その場に
いる役員女子は陽菜子の話を聞くと互いに手を取って黄色い声を上
げていた。

男子の方は少し気に入らないのだろうか、不満そうな顔をしてい

るが静かに耐えて女子のテンションに無理やり合わせていた。努力の甲斐虚しく誰もそのことに気づいていないが…

「でもこの時期に編入なんて珍しいですね」

「そうだよな。大きな行事はみんな終わっちゃったし、あとは終業式を待つだけだからね」

「親の引越しに着いてきたからだそうですよ。それなら仕方がないと思いますけど…」

「あれ？ 朱鷺沼君の質問会でそんな答えあったっけ？」

陽菜子と同じクラスで最初に質問した森口がごく自然にそう言った。当然、それを聞き逃すほど女子の耳は甘くなく、一瞬のうちに様々な邪推でもしたのでろう、悪戯を企んでいる子供のような表情をしながら陽菜子を中心に輪を作り逃げ場をなくした。

同じ女子でありながらもその女子同士の連携の良さに驚きながらも陽菜子は後悔していた。余計なことを言ってしまった、と。

「会長、朱鷺沼君と個人的に話でもしたんですか？」

「サッカー部のエースに告白されても見事に断った会長は可愛い派ですか？」

矢継ぎはやに投げかけられる質問にどう答えてよいか分からず、陽菜子は唸った。変に否定しても逆に怪しみ勝手に想像され、適当に肯定すれば情報はすぐに学園全体に拡散されてしまうだろう。逃げ場がほとんどないと陽菜子 thought とき、ちょうどドアが開き誰かが入ってきた様子だった。

「…相談者でしょうか？」

これは抜け出すチャンスと思って輪を半ば強引に抜け出したが、そこに居たのは今まさに話題に上がっている朱鷺沼真理だった。

「あの…生徒会室はここで大丈夫ですか？」

自信が無さそうに訪ねてくる様子で役員たちは彼が話題の朱鷺沼だということを理解したのだろう、標的を一瞬のうちに陽菜子から朱鷺沼へと変え、さきほど見せた以上の連携でドアを体で封鎖した。最初、朱鷺沼は何故逃げ場をふさがれるのかわからなかったが、

女子の表情を見ると何となく合点がいったような顔をした。

「えっと…僕に何か…？」

覚悟した様子で朱鷺沼がそういうと、女子たちは待っていましたと言わんばかりに怒涛の質問攻めをした。

「さつき会長が朱鷺沼君の事を詳しく知っていたようだけど、何があつたの？」

「一昨々日道に迷っているところを案内してくれただけです。多分善意だけで声をかけてくれたんだと…」

「まあ、会長ならありえそうな話だね…」

「それじゃあその時はどんなことを話したの？」

「駅周辺の案内だけで、それ以外大した話は…」

「…ってあれ？ 君つてもしかして駅前で会長と口論していた男子？」

輪から少し外れた場所にいた…正確にはあまりにも密集していたためはじき出された女子の一人が思い至ったように突如大きな声を上げてそう言った。

「駅前で口論って…あの痴話喧嘩？」

「そういえば…いつの間にかいなくなっていたあの子かな？」

囲っている女子たちの興味を引くには十分すぎる威力だったのか、輪は声を上げた女子を通すように道を開けた。一瞬朱鷺沼はそこから逃げ出そうと考えたが、残念なことに開いた方向は窓に向かっており、ドアとは正反対の方向だったので仕方なく諦めた。

近寄ってきた女子は、朱鷺沼にゆっくりと顔を近づけ確認するようになじまじと見た。

さすがの近さに後退しようとしたが、後ろから三人に肩を掴まれ不可能になった。

しばらくすると記憶の中の情報と目の前の男子の顔が一致したのか、女子は再び大きな声を上げた。

「やっぱりそうだ！ 一昨日駅前にいた子だ！」

「そうなのか！？ 会長と一体どんな話を…？」

さすがに男子も気になり始めたのか、控えめながらも女子の輪に加わり始めた。

「ちょ、ちよつと用事を先に言わせてください！ 質問はそれから答えるので…」

我慢も限界に來たのか、半ば怒り気味に朱鷺沼が吼えた。やりすぎたと思つた役員たちはまだ冷めない興奮を抑えながらも輪を崩した。

ようやく朱鷺沼がこの生徒会室に入ってから陽菜子に話しかけることができるようになった。朱鷺沼は真つ直ぐに陽菜子の前へと向かった。

「…お疲れ様。私が変なことを言つたから」

「いえ、第五回質問返答会が開かれたと考えれば…いや、やっぱり疲れました」

その言葉に偽りは無いようで、朱鷺沼は深く嘆息した。合計回数から休み時間も返上して質問に答えていたようだった。

「まあそれは良いとして…すみません。坂井さんに一つ頼みたいことが…」

「なんですか？ 私で出来ることなら…」

「大したことではありません。また街案内をお願いしたいと思つて、至極単純な頼みだった。当然陽菜子には断る理由もないので、快く領いた。

「それだつたら大丈夫ですよ。ただ、生徒会業務も終わらせなければならぬので、放課後少し遅れますが良いですか？」

「ありがとうございます。では、放課後教室で待っているのです。よろしくお願いします」

それだけ言つと朱鷺沼は静かに生徒会室から出ていった。

話題の種が無くなつたため、一瞬静かになつたが、女子の一人が気がついた。

「朱鷺沼君、まだ質問に答えてもらつてないや！」

自然な流れで逃げ出した朱鷺沼を追跡するために、女子たちはは

したないと分かっているながらも急いで弁当を食べ終え廊下へと走り出た。

陽菜子はこれ以上巻き込まれないために関与せず、生徒会室に残った男子とゆっくり昼休みが終わるまで談笑していた。

その後、陽菜子がクラスに戻るとさらに疲れ果て机に突っ伏していた朱鷺沼がいた。息も絶え絶えながら無事逃げ切ったようで、チャームがなると同時にようやく朱鷺沼を見つけた女子たちは悔しそうに嘆いていた。

放課後。

予想以上に業務が長引いてしまったため、陽菜子が教室に向かうことができたのは空が大分藍色に染まり始めた時間だった。大半の生徒は下校済みで、いつもは生徒が雑談したりしている廊下は不気味なほどに静かだった。

普段はかき消される足音も、人がいないために反響し、良く響き、陽菜子はその音から逃れるように歩くスピードを速めた。

(…これだけ待たせていたら、朱鷺沼君は帰っていてもおかしくないですね…)

窓から見える歩道をみると、街灯がコンクリートの道を照らし出していた。

ふと一瞬、六日前に遭遇した出来事が頭をよぎった。

忘れたと思っていたのに、なぜか鮮明に映し出された光景は、陽菜子の心を揺さぶるには充分だった。

(……ようやく落ち着いてきたというのに…何故?)

足も、手も、体も、自分のものではなくなったように小刻みに震え始めた。

直ぐに帰って休まないといけないと思ったが、何も言わずに帰るのも失礼だと思って震える体に鞭を打ちながら再びゆっくりと教室に向けて歩き出す。

(少なくとも今日案内することは難しいことだけを伝えましょう…)

考えているうちに陽菜子はクラスの前に辿り着いた。

明かりが消えており、一瞬朱鷺沼が帰ったと思ったが、わずかに月光に照らし出されて影がドアの窓に写っていた。

待たせて申し訳なかったと思いながら陽菜子がドアを開けると……
「大分遅かったな。待ちくたびれて話を聞かずに調査に出ようとしかけたぞ」

今までに聞いたことがないほど冷酷な声で、耳にした瞬間陽菜子は背筋が凍るような恐怖に襲われた。

人影の方に視線を移すと、たしかにそこには朱鷺沼真理がいた。
ただし、最後に見たその姿とは全く異なっていたが。

袖と裾があまりに余っていた制服はサイズがピッタリとあっており、可愛らしかった様子は微塵もなく、腕を組んで窓縁に腰をかけており、月に照らし出されたそのシルエットが陽菜子の脳内に深く印象付けた。

陽菜子が教室に入るのを目だけで確認すると朱鷺沼らしき男は床に足を付けゆつくりと立ち上がった。

「一応この姿では初めまして、だな」

陽菜子の驚愕をよそに、男は淡々と自分のペースで話を進めていく。

「討魔師代理・朱鷺沼真理。以後よろしく頼む」

笑顔もなく、ただ冷酷に、朱鷺沼らしき男はそう言った。

「……………討魔師？」

聞き慣れない単語を耳にした陽菜子は、警戒心を一層強めながらも男に問いかけた。

「そうだ。といっても今は本職から頼まれて代理に仕事をこなすだけだな」

「……あなたは、本当に朱鷺沼君なのですか？」

「……まあ、いきなり別人になっているのを見れば警戒心を強めるのは当然か……」

失敗した、と言わんばかりに頭を押さえて男は天井を見上げた。

「仕方ない。とりあえず論より証拠だな」

それだけ言うと男は顔を強く掴んだ。

すると一瞬だけ顔がつぶれ、同時に体が縮んでいった。

あつという間に袖も裾もあり、離して下ろした手は完全に袖に隠れてしまった。

「これで信用してくれますか？」

そこには最後に見た朱鷺沼真理^{まこと}がいた。

一瞬たりとも陽菜子は目を離していない上に瞬きすらしていないので、入れ替わりなどでは断じてない。

声音は冷酷な先ほどとは違って、今日一日談笑していた時の朱鷺沼そのものであり、陽菜子は認めたくないが、徐々に彼が異様な存在だということを認識していった。

しばらくすると再び朱鷺沼は顔に手をあて、体格を大の男のものに変えていた。

しかし、そんな彼女が彼に対して抱く感情は当然、恐怖。

先日遭遇した化け物を思い出し、自身が食われる幻想が浮かび上がってきたのだ。

教室に入る前に感じた恐怖はこれが原因だったのかもしれない。

ならば、あの時帰っておけば、と後悔だけが頭の中を占めていた。逃げ出そう、という発想が無駄だと思ってしまうほど、男との距離はちかすぎた。机などの障害物があるとはいえ、体つきの良さが服の上からでもよく分かり、逃げてみてもすぐに追いつかれると陽菜子は思ったのだ。

恐怖に震える様子を見て、朱鷺沼は納得がいったように再び失敗だと思つて天井を見上げた。

「ああ、なるほど。俺がお前をこの場で殺すかもしれない、と思つた訳だな。さすがに現場を見た人間に対しての配慮が足りなかったな」

男は顔の向きを戻すと、両手を頭の後ろで組み、いきなり背を向

けた。いわゆる無抵抗の意思表示である。

「…どういうことですか？」

意味は分かってもその真意が分からず、陽菜子は警戒心を緩めることなく尋ねた。

「敵意がないことの証明だが…まだ信用はしていないみたいだな」

「当然です。裏があると考えるのが普通です」

「…ならば攻撃してきても、俺は一切反撃しない。それでどうだ？」
そう言うとも男は手をそのままにして床にあぐらをかいて座った。

「……………」

もし、敵意がないように見せつけるための演技だとしたら、ここは一撃で気絶させられるほどの威力のある攻撃が良い。陽菜子は緊迫感から普段は絶対行わないような事を考えていた。

持ち物…には残念ながら辞書の類はなく、薄い教科書やノートしかないため、攻撃には不適當だろう。周囲を見回しても机に椅子しかなく、武器になりそうなものがない。

数秒考えると、そこでようやく陽菜子は最適なものがあることに気がついた。

「攻撃しないのか？　なら信用した、と…」

言いながら男が振り返ろうとすると、頭部にとてつもない衝撃が走った。

衝撃の勢いが余って窓際の壁にその長身を叩きつけられて、男は意識を失ったようにぐったりとした。

陽菜子が攻撃した物。それは机だった。

武器として扱うには重すぎるが、投擲すれば一度だけだが十分な威力を出すことができるものだ。

相手の能力が未知数であるため、これが最善の答えだと言うべきだろう。陽菜子が動かなくなった男を見て安心しようとしたその時…

「…いきなり机とは…俺じゃなければ死んでいてもおかしくないぞ…」

体の上に乗っかっていた、投げつけられた机を押しつけて男は平

然と立ち上がった。さすがに無傷というわけもなく、額には見事な切り傷が出来ていて、それを摩りながらつぶやいていた。

これ以上有効な攻撃手段も無くなり、逃げようにも起き上がってしまつては不可能だろうと、今度こそ諦めかけたとき…

「まあ、これで敵意のないことは分かつてもらえたか？」

別段気にする様子もなく、男は投げつけられた机を元の位置に戻し、教室中央に置いてある席に腰掛けた。

「今回は、お前が出会つた化け物退治に来た。そのために情報提供を頼みたい」

男… 朱鷺沼は静かに、そう言った。

血潮編 其ノ四

「まずいくつか質問しても良いでしょうか？」

「答えられる範囲であれば」

陽菜子の警戒心は完全に解けなかったが、それでも今のよう隣り合って話をしているところを見るとある程度緩めていることは分かるだろう。朱鷺沼はようやくスタートラインに立つことができたような状態だが、大した感動もない様子で陽菜子の質問に答える。

現在、神楽坂学園の校舎から既に離れており、商店街の入口へと差し掛かっていた。

雑踏で声がかき消されるのではないかと思っていたが、予想とは異なり陽菜子の耳には朱鷺沼の言葉が一音一音鮮明に聞くことができた。

「…討魔師、というのは一体？」

「要は害ある『怪異』…化け物を排除する仕事を受け持つ人間の総称だ。と言っても俺はさつきも言った通り、頼まれてここに来ているだけだが…」

「頼まれた…というのは？」

「事前調査…と言えば良いのか？ 簡単に言うと、このあと本職がこの街にやってくるはずなんだが、それまでに討伐がスムーズに進むよう情報を収集することが今回の役目だな」

「…それではあなたは？」

「本職の力は持っていないな。素質もないが、身体能力を評価されて個人的に雇われている状態だ」

言いながらも朱鷺沼は周囲へ常に注意を払っており、何か気づいたことがあると逐一手の平に収まるサイズの手帳に何かをメモしていた。

何を書いているか陽菜子は気になったが、残念ながら身長差があるため、覗き込もうにも視線が全く届かないので仕方なく諦めた。

「でも…さきほど見せたあの変装―いえ、あそこまで行くと既に変身の域ですね―は討魔師の能力ではないのですか？」

「……体質だ。潜入調査にはもってこいだと言われて使っているだけで、それ以上でもそれ以下でもない」

そんな風に話しているうちに、朱鷺沼は陽菜子と最初に出会った路地裏への入口で足を止めた。

陽菜子はゆっくり狭い道を挟んでいる建物を見上げると、電気が一切点いておらず、看板もいつから放置しているのか、所々に罅が入り長年放置されていた空ビルだということに初めて気がついた。

化け物に遭遇した時は、駆けつけようとした時も、化け物から逃げ切った時も急いでいたので気にする暇もなかった。

そこで陽菜子は、あの化け物がこの男に何らかの関係があるのではないか、と思い始めた。

「…私の出会った化け物について、何か心当たりがあるんですか？」
陽菜子は先程から気になっていた事を、意を決して尋ねることにした。

僅かに震えているところを見ると、恐怖は拭いきれていないのだろうが、それでも知らずに正体不明に怯え続けるよりは良いと判断したのかもしれない。

「…それを見極めるために、お前から話を聞こうとしているのだが…」

少し呆れたように息を吐いたが、すぐに視線を戻して話し始めた。
「今のところ分かっていることは、この化け物はまだ完全に『怪異』になりきっていない、ということだけだ。一応怪異を探索する手段もあるが、それに引っかけからなかったのはそれが原因だここにきてようやく分かった…」

言いながら裏路地から体の向きを変えて駅の方へと朱鷺沼は歩き始めた。陽菜子も慌ててそれを追うように歩き始めた。

「それには何か理由があるのですか？」

「実をいえば成りきれない原因は腐るほどあるが…今は主な原因だ

けでも話しておこうか」

言いながら手にもっているメモ帳を捲り、しばらくページを探し、目的のページが見つかったのか、それを陽菜子の目前に見えるように持ってきた。

「一つ目は怪異になりえる媒体が思念を十分に蓄積仕切れていないことだ」

「思念？」

「そうだ。怪異には自然発生…つまり誕生の原点不明のものと、媒体を元に形成されるものが主流だ。妖刀村正位は聞いたことがあるだろう？」

朱鷺沼の問いかけに、陽菜子は静かに頷いた。

妖刀村正は時の將軍家徳川が忌避した刀であり、徳川家に様々な災いをもたらしたとされる伝説はある程度国史に興味があれば大半の人間は知っているであろう。

「媒体を刀にして悪意が蓄積されたものが妖刀村正だ。一部の歴史書には作り話として扱われているが、実在した怪異だ。被害は…記述以上に甚大だったらしいが…」

「悪意が蓄積…というのは、人の悪意が怪異を生み出している、ということですか？」

少し気になったのだろうか、陽菜子は躊躇いがちではあるが朱鷺沼に尋ねた。

その回答に頷きながら朱鷺沼は話を続けた。

「正解だ。話が早くて助かる。妖刀も徳川家に支配された、もしくは滅ばされた豪族の怨念が一刀に募ったがために生まれたものだと言われている。日本全国を支配する上では大きな犠牲があったから、当然といえば当然だが…」

言いながら朱鷺沼はメモ帳の次のページを開く。

そこには『媒体型怪異・種類』と見出しらしきものが書かれており、三種類の絵が書かれていた。画心のなさに陽菜子は頬を引き攣らせたが、幸い朱鷺沼には気づかれなかったようだ。

「これにもいくつか種類があつて、意思を持ち自律行動をするもの、持ち主に憑依して殺戮を行うもの…例外的ではあるが中には自らの意志をもつて人間に力を貸したものもあるな…」

朱鷺沼はゆつくりとそのうちの一つを指差し、静かに口を開いた。
「今予想できる化け物は自律行動可能型だが…それだと少しおかしな話になるんだ」

「…おかしい？」

一応の理解はできているが、陽菜子にとっては創造の世界だと言われても不思議ではない話なので、朱鷺沼がおかしいと言えば全てが全ておかしく見え始めた。

「…説明が足りなかったな。これらは全て『怪異』になっていることが大前提、だと言えば理解できるか？」

その言葉でようやく合点がいった。

「…まだ怪異になつていないのに、動き回っている事ですか？」

陽菜子の返答が正解だったらしく、朱鷺沼は再び頷いた。

「怪異であれば探索法に引つかかるはずだが、該当せず。怪異に成る前だと仮定して気配を探ってみても一箇所にとどまっていらない…討魔師としては前例のない事態に少し困っていたところだった。このままでは更に被害が出る…指をくわえて眺めているわけにもいかないからな…」

陽菜子に見せていたメモ帳を懐のポケットにしまつて、姿勢を正した。やはり背の高さが露骨に現れ、陽菜子より頭一つ半高いことがここにきてようやく分かった。

その高背が急に陽菜子へと顔を向けてきたので、思わず悲鳴を上げそうになったがかううじて堪えることができた。

「その化け物に接触したお前から話を聞こうと思つて神楽坂学園に無理矢理ではあるが編入してきたというわけだ…これだけ話せば情報提供を頼めるか？」

その表情は真剣そのもので、陽菜子には断る理由がなかった。
早期に解決しなければ、あの時見たような被害者が更に現れる…

いや、もうすでに更なる被害は、彼女の知らないところで出ているのかもしれない。

自分が直接関与することはできないが、それでも何もしないよりは良いと判断したのか、陽菜子はその時の事を可能な限り詳しく話した。

化け物と出会った状況、姿形、様子など思いつく限り話しているといつの間にか坂井と書かれた表札のある家の前にまで来ていた。

つまり陽菜子の家にまで辿りついたのだ。

「それでは今日はこれで…」

と、陽菜子が別れの挨拶をしようとしたが、そこには既に朱鷺沼の姿はなかった。どこに行ったかと辺りを見回してみると、迷うことなく玄関口にまで歩いていく朱鷺沼の姿が見えた。

「ちょ、ちょっと！ どうして家にはいるうとしているのですか！」

慌てて駆け寄り外に出そうと思っただけ、肩をつかんで引つ張ったが、体格差が顕著に表れたと言うべきか、朱鷺沼は微動だにせずその場に静かに立っていた。

「どうして…と言われても…お前がその例の化け物に魅入られたから、喰われるのを防ぐためだが？」

「……………え？」

「大抵の怪異は人に見られることを嫌って、表には出ないのだが…今回の場合のように意図せず見つかった場合などは、見た人間を殺しに来る事がある。そして話を聞いたところ、その化け物は人を喰らって成長しているかもしれないな」

その言葉に再び恐怖がよみがえってきた。

あの醜悪な化け物が自分を喰らいに来ている…そう想像すれば当然の反応だろう。無意識的に体の震えを抑えるように陽菜子は自分の体を強く抱いた。

「むしろ今まで良く無事だったと感心したいくらいだ。一人暮らしで最初に遭遇して以降一度も化け物と接触していないとは…奇跡としか言いようが無いな…」

家全体を眺めながら朱鷺沼は呟いた。

「ただ、その奇跡がいつまで続くかは全くわからない…もしかしたら今目を離れた瞬間に喰われるおそれも無いわけではないからな。今後は化け物退治が終わるまで俺もここを拠点とする。質問は…後にするか。とりあえず家の中で落ち着いてもらうしかなさそうだな」

朱鷺沼は鍵を何らかの物で開け、静かに潜まった坂井家へと二人は入っていった。

―同月十二日六時二三分・坂井陽菜子自室―

日も昇っていない時間帯に陽菜子は目が覚めた。

いつもより目覚める時間が早いことに驚いたが、寝た時間を考えれば当然かもしれない。家の前に着いた時間は七時頃で、そのまま眠れば早くに目が覚めるのも仕方がないことだろう。

服は制服のままだったので、皺になることが気がかりだったが、朱鷺沼も男なので着替えさせるわけにもいかなかったのだろうと納得する事にした。

体を起こすと体中に痛みが走ったようだが、近頃睡眠不足だった反動かもしれないと思って陽菜子は体を軽くほぐしてみると、今まで以上に体が軽くなった気持ちになった。

誰かが守っているという安心感からだろうか、原因は彼女自身でもわからなかったが、震えも治まり大分普段の調子を取り戻せたようだった。

陽菜子の部屋は二階にある…というより客間も含めた寝室が全て二階にあるので、そこに朱鷺沼もいると思って探してみるのが、客間・両親の部屋挙句の果てには物置も探してみたが、彼の姿は見えなかった。

どこに行ったのかと思いながら一階に降りると、香ばしい香りがした。

香りに誘われて台所に向かうと、昨日最後に見た姿で調理をする朱鷺沼の姿があった。

「…塩加減は…濃い方がいいのか、薄い方がいいのか…いや、最近の女子は健康にうるさいというから…よし、薄味でいこう」

ぶつくさと独り言を呟きながら目玉焼きとウインナーの炒め物を作っているようで、フライパンを両手に台所で戦っていた。

その様子に思わず陽菜子は笑ってしまい、耳に入ったのか朱鷺沼はフライパンから手を離さずに陽菜子の方へと顔を向けた。

「目が覚めたか？ 今朝食を作っているからもう少し待っている…と、勝手に冷蔵庫の材料を使わせてもらったが、大丈夫か？」

「あ、はい、大丈夫です」

言ったところで丁度レンジから焼き終わった合図が鳴り響き、朱鷺沼は素早く蓋を開けて中身を取り出し、事前に用意していた皿へとそれに乗せた。

トーストだった。

あまりにもスムーズな動作に陽菜子が驚いている間に、あつという間に朝食の準備が終わったようで、カウンターに出来たものを順々に並べていった。

「味は保証できないが…まあ体力を付けるには丁度いいだろう。先に食べていろ、少し道具を片付けてから俺も頂く」

言うが早いか、朱鷺沼はすぐに使った道具をお湯につけて、洗い始めた。

「御馳走様でした」

「お粗末様…で良かったよな？ 何しろ久しぶりだから忘れかけているんだが…」

食事が終わると同時に朱鷺沼は使用した食器をすべて片付けてダイニングへと再び腰をかけた。

「さて、昨日はお前が倒れたからそれ以上の話ができなかったが…他にも重要だと思っことを話しておこうと思う」

姿勢を正して正面に向き合う形になった。

しかし陽菜子は今朝朱鷺沼が寝室で寝た様子がなかったことが気

になり、尋ねると…

「ああ、単純な話、寝ていないだけだ」

「そんなことをして大丈夫なんですか？」

「その程度で倒れるほど軟な鍛え方はしていない。一週間不眠不休でも体調を崩すことはないぞ…それじゃあ、疑問が一つ解明されたなら話をするぞ」

そう言つて朱鷺沼は昨日使っていたメモ帳を取り出し、開いてテーブルの上に置いた。次のページが真っ白なことから説明するため昨日か今日の間に書いたというふうには想像できる。

「まず、俺がお前のガードをする理由だが…順に説明すると、お前が喰われることは化け物にとっては大きなプラス、討魔師にとっては大きなマイナスだからだ」

「…私にそんな特別な何かがあるとは思えないのですが…」

「そう思うのも不思議ではないが…そうだな、坂井は困っている人間を見かけたら迷わず助けるタイプだろう？」

「それは当然です」

「それがお前の狙われる原因だ」

開いたページを指さして朱鷺沼は続ける。

「怪異は思念を媒体に蓄積する…と昨日は言つたが、ここ五日間の調査とお前の話を統合すると、おそらくは人を喰うことによって怪異化が早まっていると想像できる」

「口封じ…とかの為ではないんですね？」

「今までの行動や聞いた話から奴にそんな知能があるとは到底思えないな。精々本能のままに人を喰つて人目から避けているようにしか思えない」

そう言つて朱鷺沼は『理由』と書かれた部分を指さした。

『1．食い散らかしている事から人を食つた証拠を隠そうという知恵はない様子』

『2．過去に犯罪などをしていた人間は食わずにただ殺しているだけだった』

「そしてこれは普通の怪異にも該当することなんだが…これらの化け物は大抵『善人を喰らう』ことによって大幅に成長するんだ」

「…え？」

朱鷺沼の話した内容は、陽菜子を見事に黙らせた。

昨日は悪意などの怨念を蓄積することによって怪異になると言っていたので、話が違っていると陽菜子は思ったのだ。それを口に出す前に朱鷺沼は説明をする。

「たしかに昨日と言っていることが変わっているとは思うかもしれないが…そうだな、善人の血を透明度の高い良質かつ大量の物、悪意及び悪人を混じり物ばかりの少量粗悪品だと言えば良いか？」

そう言いながら朱鷺沼は空いている白いページに『怪異（赤）』と書き、その左には『善人（無色大量）』を、右には『悪意（少量）』と書き加えた。

それぞれの下に箱のようなものを書き、善人と悪意を共に同じ数だけの四角を用意した。ただし白黒のバランスが明らかにことなり、善人側は十ある内の九個が白、悪意側は十の内一個だけが白で残りが黒だった。

「例えば例の化け物が白を求めているとする。その時、人一人喰らうのに必要な労力を同じとした場合は、どれだけの馬鹿でも善人を選ぶだろう？」

「…そうですね」

「そしてここでは同じ数の四角を書いているが、実際は善人の方が何十倍と数が多い。これだけの条件がそろえば、化け物がお前を喰らおうとする理由も納得できるはずだ」

陽菜子は恐怖に震えながらも静かに頷いた。

「二つ目はこれを利用した…いわゆる釣り餌役になってもらう事で早期に発見できればなんとかなるかもしれない、ということだ」

「…やはりそんな考えもありましたか…」

最初の理由を聞いたときに何となく感じてはいたが、やはり実際に聞くと感じの良いものではないのか、陽菜子のため息を吐きなが

ら答えた。

要はわざと晒すことによって誘き寄せるという手段も有りうる、ということだ。彼女ほどの正義感がなければ、大抵の人間は真っ先に拒否するだろう。彼女がそれをしなかったのは、自身が危険に晒されることによって他の人への被害を少なくできるかもしれないと考えたからだった。

「ただそれはあくまで打つ手が無くなった時の最後の手段だ。わざわざ他の手があるときにまで使う手段ではないからな…」

そう言つてメモ帳を閉じて懷のポケットにしまった。説明に慣れているというべきか、陽菜子は焦りを一切見せない朱鷺沼の行動に何となく安心感を覚えていた。

「あと注意しておく事と言えば…外で行動する場合は可能な限り日の昇っているうちに済ませてくれ。怪異を含む化け物は基本人目に晒されることを極端に嫌うから、人通りが適度に多い場所を歩いてくれ。ただし多過ぎる場所は避けてくれ。一人二人が急に減つても気づかれない場所だと余計に危険だからな」

その後、いくつかの注意事項を聞かされている内に、陽菜子はいつも家を出る時間になったことに気がついた。

「あつ、そろそろ時間ですので学園に行きます」

「そうか？　しかし時間としては早すぎる気もしないではないが…」

「生徒会業務があるので、役員は基本早朝登校なんです」

「…成程」

納得がいったのか、朱鷺沼は少し考えたあと、ゆっくりと口を開いた。

「それなら俺はもう少し遅れて登校しよう。この時間なら一時間程度仮眠しても問題は無さそうだからな」

「…軟な鍛え方はしていないのでは？」

「確かにそうだが、だからといって眠らなくても大丈夫というわけではないぞ。とにかく少しでも体調を完全に整えておかなければ、いざという時に全力を出し切れないからな」

そう言いながら朱鷺沼はその長身をゆっくりと上げ、静かにリビングのソファで横になり、あっという間に寝息を立てて眠り始めてしまった。

その表情を陽菜子がのぞき込むと、先程までは考えられないほど気の抜けた寝顔だった。討魔師なんて物騒な生業をなしているような人間には到底見えなかった。

持ち込んだものは学園でも使っていた力バンのみで、あの怪物と戦うようなものは持っておらず、いざ襲われたときにはどのように対処するのか気になったが、不思議と不安にはならなかった。

何故か朱鷺沼は胸に嚴重に封をかけられた一冊の本を抱いていたが、表紙には文字一つ無いためなんの本であるかは陽菜子には全くわからなかった。

「…それでは、行ってきます」

静かに陽菜子がそういうと、朱鷺沼は無意識的に頷いた。

血潮編 其ノ伍

―同日十六時十二分・商店街―

朱鷺沼も陽菜子も学園での生活は特に大した問題もなく終えることができていた。途中生徒会役員女子の追送戦もあったが、朱鷺沼は少年状態の体の小ささを利用して様々な場所に隠れて、変な追求を一切されることなく放課後まで逃げ切ることができた。

現在朱鷺沼は単独で情報収集のために、駅周辺を散策していた。姿は当然というべきか、青年状態だった（少年状態では探偵ごっことされてまともに相手をされなかったため）。

身に纏っているものは学園の制服ではなく黒のスーツであり、朱鷺沼の長身にはよく似合っていた。

その格好で話しかけると店員は朱鷺沼を刑事か何かと勘違いしたのか、ようやくまともに取り合ってもらえるようになった。

朱鷺沼はその店員の様子から聞き方を少し変えてみようと考えた。「最近この周辺で人がなくなった事件について知っていることがあれば詳しくお聞きしたいのですが…お時間をとってもよろしいでしょうか？」

できる限り低姿勢で、ただし断りづらいように威圧感を交えて静かに尋ねることにした。

さすがに若い店員は慣れていない気迫に押されて思わず「はい」と言ってしまった。

「五日ほど前に空きビルが多い辺りの路地裏で、惨殺死体が発見されたことはご存知でしょうか？」

朱鷺沼が学園に向かう前に簡単ではあるが情報収集をしていると、全国紙では小さくではあるが取り上げられており、地域紙には細心の注意を払うよう大きく書かれていた事を確認しているので、日にちと大まかな内容を話すだけで店員は理解したように大きく首を振った。

「は、はい…あ、そ、それなら店長の方が知っているかもしれません！俺…いえ、自分はその日は休んでいたの…」

朱鷺沼の（無意識の）威圧感に緊張しながらも若い店員は答えた。その場から逃げ出したい、という雰囲気もありありと朱鷺沼に伝わっていたので、店の奥を見ながら話した。

「…そうですか。それではお取次ぎを願えるでしょうか？一週間前の事件解決のためにご協力お願いします、と…」

「わ、わかりました！」

そう言う若い店員は慌てて店の奥へと駆け出していった。プレッシャーに堪えきれなかったのか、僅かにふらついて、曲がり際に足をぶつけていた。

「…もう少し穏便な気配を出すように…は無理か…」

見た目相応の話し方だと自負していたようだが、若い店員の反応を見て朱鷺沼は反省していた。変えてみようと思いのなかで他の話し方を想像してみたが、どれも自分には合わない判断するときっぱりと諦めていた。

しばらく店の前で待機していると、先ほど走り去っていった若い店員が申し訳無さそうに現れた。

「…お話ができないと言われましたか？」

「い、いえ！話はできると言っていたんですが…！その、非常に言い難いんですが…」

若い店員は大通りの方へと目をやった。それを追うように朱鷺沼が視線を移すと、何事かと気になった客が店に入れない様子だった。「その…非常に目立つので裏口の方に回って欲しい、といわれたので…」

「…失礼しました。これは立派な営業妨害ですね…」

「申し訳ありません、店の横道から入ってくれば店長が待っていますので…」

「分かりました。ご協力に感謝いたします」

それだけ言い残すと朱鷺沼は堂々とした様子で裏道へと入ってい

った。

裏道は昼間だというのに薄暗く、本来人二人分くらいあるはずのスペースはポリバケツやゴミの入ったビニール袋が無造作に置かれているために非常に歩きづらい状態になっていた。

いくつかのゴミ壁を飛び越えると丁度十字路にさしかかり、朱鷺沼が左を見るとそこには先ほどの若い店員が着ていたような制服を身に纏った中年男性がいた。彼が先ほど若い店員の言っていた店長だろう。

店長は裏路地に入ってきた朱鷺沼に気が付いたようで、手を振りこちらだということをアピールした。幸い道が塞がれているなどのことは無かったので静かにたどり着くことができた。

「すいません、わざわざこんな場所にまで来ていただいてもらって……ただ、内容が内容だけに表で話すべきではないと思ひまして……」

「その配慮は妥当です。加えて、お時間を取らせてしまつて申し訳ありません。ご協力に感謝します」

「いえ、事件の解決をしてくれると言うのなら協力は惜しみませんよ。話を聞いてくれるとは思つてもいませんでしたので……」

店長は内心溜まつていたものをようやく吐き出せるといったような安心したような表情をした。その言葉に違和感を覚えた朱鷺沼は眉を顰めた。

「失礼ですが、話を聞いてくれるとは思わなかった……とはどういうことでしょうか？」

「いえ、実は警察が事件後に調査に来たのですが、特に聞き込み調査などをするわけでもなく、死体を片付けるだけで帰ってしまったので……ところで貴方は刑事さんでよろしいのですか？」

「……はい。本来管轄外の件ではありますが、解決していないということで独自に調べさせていただいています」

話を円滑に進めるための嘘ではあるが、決して全てが嘘というわけでもない。実際これらは本職の仕事でありながらも人員不足で、個人的な依頼で動いている。

それに、彼は彼自身の為に動いている、ということもある。

「それで、事件当日の事に関して詳しくお聞かせ願えますか？」

「はい……」

話を促すと、店長は何から話すべきか少し悩んだが、朱鷺沼が「ゆつくりで大丈夫です」というと、一つ深呼吸をした後静かに話し始めた。

「当日の五時位でしょうか……その時間にいつも店で出たゴミを一通り纏めるためにこの裏口にくるのですが、その時に何やら悲鳴が聞こえたんですよ……向こうの方からです……」

そう言って店長はゆつくりとその方向を指さした。確かにその方向は朱鷺沼も既に一度向かっており、惨劇の名残が忌々しく残っていたのは記憶に新しい。

「何かと思つてしばらく見つめていたんですけど……その後は静かだったので店に戻ろうとしたら、今度は呻き声みたいな声と、肉を叩きつけたような音が路地に響きわたったんですよ……そしたら……」

思い出したのか店長は体が僅かに震えていた。が、そこで話を止めずに続ける辺り、これだけは伝えなければいけない、というような使命感があるのかもしれない。

「……大きな化け物が……そこをゆつくりと歩いていました……思わず店の中に慌てて駆け込んで……ドアの隙間から覗いてみたら……」

鮮明に思い出してしまったのか、店長の顔は青白くなり、手足も震えているようで視線を下に向けてしまった。

「……その化け物の特徴を……覚えている限りで良いので聞かせていただけませんか？」

朱鷺沼の反応は予想外だったのか、店長ははっと顔を上げ、朱鷺沼の顔を、目を見開きながら静かに尋ねてきた。

「こ、こんな話を信じてくれるんですか……？」

信用されないことを覚悟して話していたようで、店長の顔はどうか安堵の色が含まれていた。

「詳しい内容はお話出来ませんが、他にもそのような化け物らしき

モノを見た、という証言があるので、ご安心を。そして現在事件の原因はそれにある、と自分は考えていますので…」

そう言っていると店長は朱鷺沼の右手を両手で強く握りながら頭を下げた。

「ありがとうございます…！ これを話しても誰も信じてくれず…怖くて今まで眠ることもできないほどでした… 姿を見た自分が、いつか…襲われるんじゃないかと…」

最後の方は嗚咽も混じっており、どれだけの恐怖を一人で抱え込んできたのかがなんとなくだが朱鷺沼に感じられた。

陽菜子の場合同様に、知らない人間には夢物語にしか聞こえないだろう、故に誰もその恐怖を和らげるものが存在しないがために、一人怯えながら日々を過ごしていたのだろう。

「…早期解決のためにはその化け物の情報が必要不可欠です。お聞かせ願えますか？」

朱鷺沼はできる限り優しく尋ねると、店長は怖々と話し始めた。

「この店の丁度二階の窓くらいの大きさで…影だけだったのではつきりとはわかりませんでした、首が無い様に見えました。歩くとびにビチャ…というような音を立てているのも覚えています…私に分かることはこれだけです」

店長が特徴を挙げると朱鷺沼はすぐにそれをメモに走り書きで残した。それもすぐに終わると、視線を店長に向けた。

「ありがとうございます。この情報も参考にして今後調査を進めていきたいと思います」

「役にたてたなら光栄です」

「ただ今後の生活には充分気を付けてください。日が落ちてからは路地裏に入るような仕事をしないでください。またいつどこでその化け物が現れるかわからないので」

「分かりました…いや、本当に平和だった街にこんな事件が起こるようになってしまったのでしょうか…？」

「自分は管轄外なので詳しいことは分かりませんが…何か境目、の

ようなことはありませんでしたか？」

折角なので他にも情報が無いかと朱鷺沼が話を広げると、店長は後ろ首を右手で押さえる、考えるような仕草をした。

「定かではないんですが…どうでしょう、都市開発が進んだ頃から…だったと思います。それまでは今回や今までみたいな事件は一度も起こらなかったんですが…」

「…失礼ですが、そのたびに同業は？」

「はい、ご想像のとおり、ある程度の現場検証をただけですぐに帰ってしまいました。当然、事情聴取もほとんどせずに、です」

「…ありがとうございます。先ほど話していただいた内容…特に警察の行動については全て他言無用でお願いします」

「？…分かりましたが、何か理由でも？」

「詳細を話すことはできませんが、少なくとも貴方の身の安全を確保するためです。ご理解いただければ幸いです」

「…分かりました。では私はまだ仕事があるので…」

真剣な表情で真理が言うと、店長は怯えた様子が一瞬見えたが、すぐに静かに頷いて背を向けた。

「ご協力ありがとうございます」

そう言って朱鷺沼は店長が店に入るまで深く頭を下げていた。

―同日同時刻・神楽坂学園体育館―

坂井陽菜子の姿がその中央にあった。

白い道着に身を包んで。

対峙しているのは体格のよい男子生徒で、陽菜子より頭一つ分大きく、道着から見える腕は丸太のように太かった。

周囲にはギャラリーが集まり、皆興味津々な様子で二人を見ていた。

「それでは、お願いします！」

「お手柔らかに」

男子生徒が元気よく、勢い良く礼をするのに対し、陽菜子は静か

にゆっくり頭を下げた。

互いに頭を上げると同時に構えを取った。

男子生徒の構えは少々変わっており、両腕を地面に対して水平にした半身で利手である右手を顔の横に置き、左手は伸ばして視線の先に、というような物だった。

対して陽菜子の構えはごく普通の構えで、両手を前方に腰を低くするものだった。

数秒は互いに間合いを取りつつ、牽制を入れつつ前へ後ろへ、時には横へと動き様子を見計らっていた。

「セイ！」

先に動いたのは男子で、体のバネを使った鋭い上段蹴りを一切の容赦なく陽菜子の顔面へと見舞った。

予備動作が全くとっていいほど無く、素人が相手すれば恐らくこの一撃で沈んでいただろう。

しかし、陽菜子はこれを屈みつつ左腕でうまく受け流して反撃に出る。少しまともに受けてしまったが、痛みを訴えている暇はない。振りの大きい攻撃だったので、隙が生じると思って胴に向けて正拳突きをした。

だが男子は己の蹴りの勢いと、受け流された足を軸にして回し蹴りを放つ。

無理矢理、という形は否めないが、十分な二段構えの蹴りであり、陽菜子が想像していた隙は生じることがなく、仕方なく攻撃を避けるために後退せざるをえなかった。

空けた間合いはおよそ二メートル。

攻撃するためには互いに一步以上踏み込まなければならぬため、反応には十分な間合いを確保することができたが、やはり体格差によるリーチ差は陽菜子の方に若干の不利があるため、決して陽菜子にとっての良い状況になったとは言えない。

再び牽制のし合いとなる。

周囲の観客は先程の攻防が感動の余韻を残しているためか、徐々

にざわつき始めるが、試合中の二人は極度の集中状態に陥り、それらの音を一切気にする様子もなく互いに睨み合い続けていた。

数十秒ほどその状態が続いた頃だろうか、今度は陽菜子が先に動いた。

真っ直ぐにぶつかるとはではなく、岩野の背後を取るように右へと飛び、攻撃をするという手段だ。

「ハッ！」

岩野もそれを追う様に体を回すが、残念ながらここで体格の差が裏目に出てしまった。

その大きな体を素早く反転させることが、陽菜子の動きはそれを上回る速さで、迎撃の手を打とうとした時は既に陽菜子の拳が胴に当たる寸前にまで迫っていた。

避けようにも距離がほとんどないために間に合わず、岩野はほぼ条件反射で最も陽菜子に近い左腕で反撃に出る。

しかし無理な体の捻りから出した正拳に勢いが乗るはずもなく、先程の上段蹴りを受け流した陽菜子にとって避けることは容易だった。

岩野の攻撃をくぐり抜けるように避け、拳が顔の横を掠めても動じることなく前に進んだ。

拳が胴の真ん中に当たる寸前に二人は動きをピタリと止めた。

先程までの会場の騒々しさが嘘のように一瞬だけ静まり返った。

岩野は突き出した拳を引いて陽菜子から数歩分の間を取ると静かに言った。

「……………参りました」

その一言で、周囲の観客は突如ワツと盛り上がりを見せた。

冷めない熱が抑えきれなくなったのか、全員がそれぞれの感想を二人に向けて放った。

「さすが会長です！ 素敵です！」

「岩野も会長相手に良くやった！ この調子で大会も勝ち進めよ！」
次々に投げかけられる賞賛の言葉に対し、陽菜子は少し照れくさ

そつに、空手部大将の岩野は高々と拳を振り上げて『観客の期待に答える』という意思を示していた。

徐々にそれらの声も収まり、観客が去っていく中、岩野が陽菜子を呼び止めた。

「会長！」

ゆっくり振り返ると同時に、深々と頭を下げている岩野が目に入った。

「…何でしょうか？」

「今日はお忙しい中、わざわざ自分の組手にお付き合いただきありがとうございます！」

声は床に向かいながらもよく響き、岩野のいる体育館中央から陽菜子のいる出入口まで一音一音はつきり聞こえていた。

「どういたしまして。明日もその調子で頑張ってください！」

「はい！ありがとうございます！」

その言葉に応じるように、空手部一同も揃って頭を下げ陽菜子及び生徒会役員たちが体育館から出て行くのを見送った。

「大会…満足のいく結果が出るといいですね」

着替えを終わらせ、更衣室から出たところで隣を歩いていた役員女子に尋ねるように陽菜子は呟いた。当然彼女たちはこの言葉を聞き逃すはずも無く、楽しそうに答えた。

「大丈夫ですよ！ 岩野主将の動きも凄く切れていましたから！」

「でも相変わらず会長の試合は見蕩れてしまいます… 武術系の部活で会長に勝った人っていましたっけ？」

「今のところ一度も負けていない上に、今回の試合で全部活の主将・エースに勝ったことになるので…」

「…学園最強の生徒会長ですか… 格好イイですね！」

「アハハハ… それだとなんだか物騒な人に聞こえますね」

大会前最後に自分の实力を知りたい、ということと突如組手を申し込まれた陽菜子は一切の躊躇いなくそれに応じた。

これは陽菜子が学園内で独自に行なっている相談の一例であり、

何事にも真摯に向き合う陽菜子に生徒たちがそれぞれの悩みを相談しに来て、空いた時間を利用して行動するというものだった。

今回のように実践的な組手を申し込まれるようになったのは、最初に「試合で勝てない」と悩みを相談してきた剣道部部員から始まり、その悩みを聞いた陽菜子が中学までに習った武術経験を活かして指導・組手をしたことからだった。

戦績は先程役員女子が述べたように全戦全勝。

その結果に周囲の女子は感動を抑えきれない様子で騒いでいたが、陽菜子は少し浮かない様子だった。

（でも…あの化け物相手には何もできなかった…）

少しだけ先週の事を思い出してしまったようで、陽菜子の手は僅かに震えていた。幸い周りにいる女子たちには気付かれていない様子だ。

（…朱鷺沼君はあんなものを相手にするのでしょうか…）

そして今まで一切たりとも知ることの無かった『討魔師』という存在。

今の陽菜子の様な賞賛を一度も受けることなく、人知れず化け物と戦っていたのかもしれない。

陽菜子は心半ばで話をし、途中駅で全員と別れてから家路へと着いた。

朱鷺沼の情報収集も滞りなく終わり、陽菜子の生徒会業務もその後の相談も早いうちに終わらせることができ、現在空は藍色に染まり始める、という時間だった。

坂井家の食卓では少し早い夕食が始まっていた。

「…えつと…これが今日の晩ご飯ですか？」

目の前に出されたものを見ながら、陽菜子は呟いた。

テーブルの上に出された物は、ネギだけが気持ち程度乗せられた素うどんだった。

「そうだ」

平然とした様子で、麺を静かにすすりながら朱鷺沼は頷いた。

「…朝食とは全く違って質素ですね。朝は豪華に、夕方は質素に、が朱鷺沼君の食生活なのですか？」

「いや、単に朝の料理で材料をほとんど使い切っただけだ」

「だとしたらその事をきちんと朝のうちに話してください！」

情報共有の大切さが切にわかった瞬間だった。

もし今朝のうちに話していれば帰り際の商店街である程度揃えることも出来たのに、と今更考えても仕方のない後悔をしていた。

そんな陽菜子の心情を一切感知せずに朱鷺沼は箸を進める。

黙々と。

モグモグと。

「冷蔵庫の中身ぐらいは把握していると思っていたから言わなかったただけだ。というよりこれも偶々あった小麦と塩で作ったんだ。労いを受けても批難を受ける道理は無いと思うぞ？」

話している間にも朱鷺沼は自分の分を全て食べてしまったようで、うどんの入っていた器には汁一滴も残っていなかった。

「さて、食べ終わった食器は水に浸けておいてくれれば勝手に洗っておくから、坂井は風呂にでも入ってこい。その間で俺はやるべきことをやらなくてはならないから…」

それだけ言々と陽菜子が戸惑う様子は一切無視してリビングのソファに座り、テーブルの上に二つのメモ帳とよくわからない機械を並べた。

「あ、朱鷺沼く…」

と、声をかけようとしたが、本能的に口を閉じてしまった。

朱鷺沼の身に纏う気迫が一気にふくれあがり、話しかけることも躊躇ってしまうほどその横顔は非道く真剣なものだった。

「……………」

伸ばしかけた手は行き場を失い、仕方なく用意された箸に移した。用意されたうどんは丁度良い温かさになっており、出汁の良く効いた汁が食欲を誘う。

「…いただきます…」

持ち上げて中身を見ると、その量は先ほど朱鷺沼が食べていた量を大分上回っており、陽菜子には最適の量だった。

食べ終わると同時に朱鷺沼も一段落したのか先ほどの緊迫した雰囲気を一気に和らげて深く息をついて、静かに立ち上がった。

「…丁度食べ終わったか、それじゃあ器は下げるぞ」

朱鷺沼は陽菜子の確認を待たずに器を下げて台所へと向かった。陽菜子は朱鷺沼が仕事（？）に集中している間に食器を洗ってしまったおうと考えていたため、完全に手が空いた状態になってしまった。

ゲストがホストをもてなす状況に、陽菜子は多少の居心地の悪さを感じていた。

何かないか、と部屋の中を見回していると、リビングのテーブルの上に朱鷺沼の本が一冊だけ片付けられずにいた。

今朝、朱鷺沼が仮眠をした際に大事そうに抱いていた、嚴重に封をされた本だった。

これだと思った陽菜子はすぐに席から立ち上がり、善意で片付けようとした。

「朱鷺沼君、この本はどこに…」

「それに触れるな！」

尋ねて返ってきたのは怒りを込めたような低く大きな声だった。

突然のことで陽菜子は触れようとしていた手を本能的に引っ込めた。

「え、あの…何か危ない物でしたか…？」

「…驚かせて悪かったな…ただ、それだけは誰かに触られるのが嫌で、つい…」

しばらく、食器を洗う水の音だけが坂井家に響いていた。

「…えっと…討魔師の重要な本ですか？」

「普通の日記だ…ごく、普通の、他愛の無い事ばかり書いてある、な」

日記だと言われた物を見ると、所々に傷が付き、側面から見える紙はかなり色褪せているのが分かる。

リビングに居難くなった陽菜子は、仕方なく風呂に入ること決め、静かにその場から立ち去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6893x/>

紅鬼-ORGA-

2011年12月2日18時54分発行